

コラム

「自粛の自粛も必要なのかもしれない」

客員研究員 新井 光雄\*

一つの言葉が大きな意味を持つことがある。「言霊」という言葉があるほどであり、人間の行動を強く拘束する。様々あり、人によって、また、その時代によって、時によってという面が当然あるから一概には言えないが、最近でいえば「自粛」がある。東日本大震災に関連して、多くの行事が自粛ということで中止となり、ちょっとした集まりのようなものも中止となったり、延期となったりしたようだ。個人的にも結構あって、十年ぶりに会うことが決まっていた知人との昼食延期に始まって、趣味の会合などは全て延期、元の勤め先のOB会も様子をみようとなった。習いごとのようなことも、教師がその気になれないということで、三月はお休み。かなり強烈的な「自粛ムード」だった。

何か行動をしようとするすると一種の罪の意識に似たような感情が沸いてきてしまう。当然、恒例のワイン花見会も中止。会費は義捐金に、となった。確かに強制されてのことではない。無理をし過ぎているというほどでもないが、多少窮屈だ。それにこれでは誰が考えても明らかに景気に影響してしまう。間接的にも、ひょっとすると直接的に被災地への影響も出ていくことになりかねない。デパートのなかを歩くとその人の少なさに驚くし、レストランでメシを食い、「どうか」と聞けば、「地震後さっぱりです」と出る時にボーイが玄関の外まで見送ってくれる始末。これは相当なものだ、と思わずにはいられない。さすがに、こうした状況に過剰自粛はやめよう、などと新聞までが反応している。もっともなのだが、案外、これが難しい。伝統の祭りの中止など開催の是非を聞かれたら返答に困る。大学などの卒業式、入学式なども同様で、個人的には震災を心の底に意識して粛々とやればよいと思うのだが、そうでもないらしい。

こんなところにいくつかの経済指標が発表された。最近は余り気にしなかったのだが、さすがに目下の状況だと関心を持たざるをえない。新聞の扱いも大きい。そしてその自粛の一端を数字で知ることになる。ちょっと大袈裟に言えば、ただごとではない。そんな具合にも取れる数字とも思える。

総務省が四月末に発表した三月の家計調査（速報）が現状を分り易く教えてくれる。ぴったりではないが自分の行動も反映されていて、不謹慎だが思わずにやりとしてしまった。まず、一世帯あたりの消費支出額だが、これが約29万3000円で、物価調整後で前年同月比マイナス8.5%の減。これは過去最大の下落率だそうで、東日本大震災の影響による消費マインドの低下、自粛ムードが決定的に響いた結果という。下落率過去最大が余分な説明を拒否するがごとしだ。それも東北・関東は約10%と高い。これも説明の必要なしという感じだろう。

ばかばかしいがこれを個人生活に還元してみたのだが、もっと激しい下落率になった。妙な例となるが、小遣いが余り減らないのだ。簡単にいえば飲み代がほとんど三月は必要がなかったのだ。居酒屋の安酒なのだが、行く回数が激減してしまっていた。研究会、勉強会などの後は軽く、

\* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

と声を掛け合うのだが、それをしなくなっていた。むろん、全くではないのだが、その気分にならないことが多い。誰からともなく遠慮ということになる。多分、この気分は大袈裟に言えば全国民を濃淡ではあれ覆っているのだから、大変な話だ。

数字に聞こう。食事代約 14%減。問題の居酒屋関連で飲酒代が約 36%減。半減とまでは言わないが、三回に一回は削られている勘定になるのだから、飲み屋さんはたまったものではないだろう。宿泊料の約 34%減も相当な数字。宿の女将さんの悲鳴が聞こえてくる。言うまでもなく、娯楽関連もかなりの落ち込み。要は楽しみにつながるようなものは一切、自粛ということなのだろう。十分理解は出来る。集団の花見は遠慮したが、個人では行ってみた。予想通りに人出はいまひとつだった。どういえばいいのか賑わいが無い。多分、大きな声を出すことも「自粛」という感じになっていたのかもしれない。行った公園は酒持込禁止なのだが、今年は異常に厳重で、ビールの袋を持っていたお年寄りが入り口で注意されていた。普段だったら黙認していたのではなかったか。

もっとも消費拡大もあったようで、震災直後のまとめ買いなどからミネラルウォーターが約 161%増。カップ麺が約 43%増だったそうで、これは全く自粛の反対。言ってみれば他を考えない薄情指数ともいべき数字と言えるだろう。自粛する一方での利己的行動。敢えて言えばどちらにも問題ありということなのかもしれない。下らない結論だが、どうも何事も「中庸」が大事ということになる。それにしても計画停電ということから節電が求められ、商店街が暗い。これは物理的に暗いのだが、明るいのには慣れていたせい、閉まっているのかと誤解してしまうようなお店もある。元の明るさに、と簡単には言えないところが面倒だが、やはり無理のない範囲で非被災地の生活を元に戻すことが被災地にとっても良いことのように思えるがどうだろうか。それでも確かにそうするには申し訳ないという気持ちになってしまう。困った。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)